

メーキャップとノーメイクとで近くで顔を見られる時の心理状態に違いはあるか？

Is there any Difference of Psychological States between the Conditions to Be Seen the face with and without Makeup by Others in Near Distance ?

平尾直靖¹⁾、山南春奈¹⁾、大平英樹²⁾

Naoyasu HIRAO¹⁾, Haruna YAMANAMI¹⁾, Hideki OHIRA²⁾

E-mail : naoyasu.hirao@to.shiseido.co.jp

和文要旨

本研究では、メーキャップによる容貌の変容の自覚が自律神経系活動に及ぼす影響を検討した。30～39才の女性20名を対象に実験を実施した。実験参加者は2度実験に参加し、1度はメーキャップをする条件(MK条件)、もう1度は素顔の条件(NMK条件)だった。MK条件とNMK条件の被験者を対面させ、0.4・0.8・1.6・3.2・6.4mの5つの距離条件下で、皮膚抵抗水準(SCL)と心拍数(HR)を測定し、メイクの有無(2)×距離(5)の条件の効果を統計的に検討した。その結果、SCLはMK条件の方がより高い傾向を示した($p<.10$)。また、距離の短さに依存してSCLの振幅は高まり($p<.01$)、逆にHRは低下した($p<.01$)。この結果より、メーキャップには、心理的な高揚感を生じさせる効果がある可能性が示された。

キーワード：メーキャップ、自律神経系、皮膚電気活動、心拍数

Keywords : Make-up, Autonomic nervous system, Electro-dermal activity, Heart rate

1. はじめに

ヒトは目の前にいる他者の存在を無視することはできない。他者の視線を意識して過度に緊張することがあり、逆に、安心感を覚えることもある。見られる自分を意識するとき、魅力的だと思われるかは、とりわけ多くの女性にとって強い関心事である。魅力的な外見が社会的な利得に繋がるといことは、先行研究によっても示されている[1]。

他者が自分に目を向けていることを意識するだけで、その他者から見た自分の外見に対する評価懸念が生じる。視線恐怖、醜形恐怖といった精神疾患は、美容意識と精神活動との深い関連性を示すものである。逆に、自分を好意的に評価し、受容してくれる他者の存在は、安心感を与えてくれ

る。

化粧品は一般に、肌の状態を整え、より魅力的に彩るために用いられる。化粧の心理学的な效用として、メーキャップによる外見の補正が心理的な安定に寄与しうることは、多くの先行研究が示している[2]。生理心理学的な影響については、太田母斑のある女性にカバー力のあるメーキャップを施したところ、唾液中s-IgA(secretory immunoglobulin A)濃度が増加したことが報告されている[3]。また、メーキャップ後に、唾液中スーパーオキシソアニオンの消去酵素であるSOD(superoxide dismutase)活性、過酸化水素の分解酵素であるカタラーゼ活性が増大し、同時に唾液中コルチゾール(cortisol)濃度が低下したとする報告もなされている[4]。

1) 資生堂リサーチセンター、Shiseido Research Center

2) 名古屋大学大学院環境学研究科心理学講座、Department of Psychology, Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University